

新潟応用地質研究会の思い出

山野井 徹*

私が新潟応用地質研究会を知ったのは、昭和39年でした。当時大学の2年生でしたが、友人と2人で座談会の速記の仕事を頼まれました。座談会は、新潟地震について何人かの方々が発表された後に行われました。津田先生から、発言者の名前と、話されたことを全て記録せよとの命を受け、仕事にかかりました。速記などしたことのない我々にとって話し言葉をそのまま記録することは大変なことでした。最初のうちは、発言される方も我々記録係のいる旨を知らされてか、名前を言ってから発言されていたので何とか話の主旨がわかる程度の速記はできました。そのうちに発言者がほぼ一巡すると、名のらずに話し出されるものですから「あの人誰だっけ？」などと友人と聞き合っている間にも話が進み、もう速記が追いつかない。さらに皆さん方が次第に打ち解けてしまい、座長を通しての堅苦しい話し方ではなくて、フリートキングのような状態になってしまいました。またその話がおもしろいので我々記録係もつい聞き入ってしまい、もう速記どころではない。今でも記憶にある話は、地震の際、昭和大橋の橋脚は倒れたのではなく立ったまま沈み込んだ……、とか、河渡方面では、自宅の庭の面積が倍になった所があった反面、畑が無くなってしまった所もある……などです。岩松和雄先生や牧山鶴彦先生（外部の方はこのお二人しか知らなかったのですが）など、大学外の方々が、学内では知り得ない豊富な情報を提供し、これについてディスカッションするといったような座談会でしたので、非常に新鮮な興味を覚えたことが印象に残っております。その後、座談会の記録が会誌の記事となり得なかったのは当然です。こんな印象や失敗談が新潟応用地質研究会との関わりの初めでした。

当時、幹事会は、理学部の地磁教室の図書室兼事務室で、津田先生を中心にたびたび開かれていました。4年生のときプレハブの堆積学実験室ができ、そこを研究室にしていました。ある日、ここに、幹事の皆さんが集まってこられたので、席をはずそうとすると、そのままでもいいよ、ということになり、それ以後の会議では、いつもそこで顕微鏡をのぞかせていただきました。何が話し合われていたのか記憶にありませんが、こうした席でいつも積極的に発言されていた中山さんがとくに印象に残っております。百武、岩永、須田、米沢、伊藤の諸氏を知ることができたのも、こうしたことがきっかけでした。

昭和45年に新潟県の治山課にはいるまでは、応用地質そのものには特段の興味があったわけではありませんが、そこで、地すべり防止の仕事をするようになって、この会に入りました。2・3年して幹事をおおせつかりましたが、その頃、石橋さんが、幹事として会のこまごまとした運営を手際よくこなされておりました。私はどちらかというと、福本さんなどと共に、地すべり学会の新潟支部を作ることに熱中しておりました。地すべり学会の支部ができてからは、合同で見学会や講演会を開いたこともありました。そんなわけで当時私は、地すべりの研究を通して応用地質研究会に参加しておりました。1973年の第19・20

* 山形大学教養部教授、元幹事

号には、私の応用地質に関する初めての報文を掲載させていただきました。能生町の島道地すべりについてでしたが、地すべりについて勉強を始めた頃のもので、「津田先生流」の考えながら歩く調査をもとに、私なりの詳しい観察結果を加えて、書いた記憶があります。

当時、新潟県には地すべりの研究者として、大先達の高野秀夫さんを始め、県庁には、砂防の湊元、農地の岩永、治山の福本という3傑がおりましたし、布施、永田、神田といった若手が地すべりに取り組んでいて、地すべりの研究に対する刺激を受けました。また、業界には、百戦錬磨の熊谷、牧山、寺川といった先輩がおられ、いろいろご指導を受けましたし、大西、河村（日さく）、黒木、井上（国土防災）、団（明治コンサルタント）、高橋（日特）、本田（大手）などの諸氏とは、多くの地すべりの現場を共にされ、真剣な議論の相手をしていただきました。また当時は、行政組織の中にいたにもかかわらず、防災に結び付く研究であれば、そこに多少の熱を入れようとも、大目に見てもらえる、おおらかな職場であったことも幸いしました。このように常に地すべりを考える環境に置かれ、加えて、とくに植村先生の地すべりの「進化」といった考え方や、地すべりの「型」と「岩質」に関する提言、あるいは、布施さんが新潟応用地質研究会誌（第21・22号）に発表された「粘性土系列の地すべり」と「砂礫系列の地すべり」とが独自の方向に発展する、といった地すべりに対する斬新な着想に出会い、新潟県内で見た数々の地すべりの必然性を見出そうとする私なりの地すべり感を作る基礎となりました。上記の方々は、私の地すべりという仕事に関わった方々かもしれませんが、皆、新潟応用地質研究会のメンバーでした。1地方都市である新潟でこのような方々に巡り合えたということは、今考えると、これは尋常なことではなかったと思っています。

昭和52年に新潟を離れ、山形大学に転勤しました。地すべりはもうやらなくてよいと思うと、心安らかなものがありました。ところが、山形に来て出来た友人もまた、地元の地質を語り、地すべりを語る人たちでした。そのような人たちとのつきあいの中から、山形でも多く人が参加できる地質に関する研究会を作ろう、ということになりました。そこで新潟応用地質研究会をモデルに、昭和55年に、山形応用地質研究会が発足しました。そして月日が過ぎ、一昨年に10周年記念を盛大に祝いました。この間の活動は、新潟応用地質研究会誌の第32号にご紹介致しました。

平成元年の新潟応用地質研究会の総会の際は、講演を依頼され、今まで山形で研究してきた地すべりについてご紹介致しました（新潟応用地質研究会誌、第33号に掲載）。山形に来て、もう地すべりはやらなくともよかったはずですが、山形のフィールドで地質調査をしていて、地すべりに出会うと何か血が騒ぐとも言いましょうか、もう見ずにいられない！。それなら、動いている地すべりは行政にお任せし、止まっているものを主体に見てやろう、ということで、出羽丘陵や脊梁地域の地すべりに手をつけました。その1例として脊梁部を取り上げ、「山地の形成と侵食」といった観点で地すべり現象を位置付けたのが上記の講演の内容です。当日の懇親会の席で、沼田氏（ライト工業）が、卒論のフィールド（作並周辺）を違った視点で見れたことを感激して語ってくれたことが印象的でした。2・3次会は、青木先生と山岸さんに連れられ、夜半までお付き合いをしていただきました。

平成3年の秋、かねて、川島さんや山岸さんと下準備をしていた新潟と山形の両応用地質研究会の合同の見学会を開催することができました。肘折の高温岩体の熱水試験と付近の地すべりを合同で見学できま

した。それに先立って行なわれた懇親会などを含めて、きわめて有意義な交流ができました。新潟の方々
は、快適な大型の貸し切りバス、山形の会員はレンタルのマイクロバス、この対照は、両会の規模を象徴
しているかのようでした。しかし、地域の大地をよりよく知ろうとして集っている両会の会員の気概は同
じで、再開を約束して別れました。

新潟応用地質研究会の遠くなった思い出から現在に近いことまでを回想しました。今、ここでもう一度
新潟での新潟応用地質研究会のことを振り返るとき、そこにおられた一人ひとりの皆様との出会いが私の
大きな財産になっていることに気がきます。最後になりましたが、新潟応用地質研究会が山形応用地質研
究会の兄貴分として、今後ますますご発展の上、ご指導を賜わりますようお願い申し上げます。